

脊椎動物遺体にみる奄美と沖縄

樋泉岳二
早稲田大学

TOIZUMI Takeji
Waseda University

はじめに

前回の報告（樋泉2002a. 以下「前報」とする）では、従来の奄美・沖縄における脊椎動物遺体（骨類）の調査・同定方法の問題点を検討し、用見崎・ナガラ原東の両遺跡において実践した新たな方法での資料採取・同定の成果について報告した。これと合わせて既存データの収集・比較も行い、用見崎・ナガラ原東での所見も踏まえて、貝塚時代～近世の脊椎動物遺体群について、とくに貝塚時代からグスク時代への変化に焦点を当てながら概観し、自然環境と資源利用の変遷について考察した。なお、ナガラ原東貝塚では前報以降に追加データ（樋泉2002b・2003）が得られているので、前報の表1にこれを加え再構成した（表1. 前報の表では合計値にニシン科の値が含まれておらず、他の数値にも若干の誤りがあったので訂正した）。

今回は、まず奄美大島笠利町安良川遺跡、同マツノト遺跡の分析結果について報告する。次に、両遺跡および用見崎・ナガラ原東の分析結果に他遺跡のデータも加えて、貝塚時代後期における魚類・鳥獣類利用の様相について奄美大島と沖縄を比較し、それぞれの地域性とその背景について検討する。

1. 安良川遺跡およびマツノト遺跡の分析結果

(1) 安良川遺跡

安良川遺跡は奄美大島北部笠利町の海岸砂丘上に形成された兼久式期の遺跡である（笠利町教育委員会編2005）。ここでは本遺跡の2003年発掘調査で採集された骨類の同定結果（樋泉2005）について概要を述べる。

資料 採集された骨類には、堆積物サンプルの水洗によって採集された資料（以下「水洗資料」と、発掘時に手で拾い上げられた資料（以下「現地採集資料」）がある。水洗資料については、遺物包含層（3層）を対象として、30cm角のコラムサンプルをB-4区で2箇所（サンプルNo.1・2）、D-1区とE-1区の境界付近から検出された「ウニ溜まり」の北側で1箇所（サンプルNo.3）、A-1区で1箇所（サンプルNo.4）、計4箇所から採取した。またA-1区北壁（「No.4脇壁面」）および調査区南側崖面のD～E区付近（サンプルNo.5）からもブロックサンプルを採取した。「ウニ溜まり」の堆積物についてもサンプルを採取した。そのほか調査区南側崖面のC区付近において、遺物包含層下の白色砂層（4層）中にレンズ状の腐食質暗色砂層（「南側砂層中レンズ」と仮称）の介在が確認されたので、ここからもブロックサンプルを採取した。これらのサンプルは自然乾燥・計量の後4mm・2mm・1mm目の試験フルイを用いて水洗し、残留物の中から骨類を抽出・同定した。

分析結果

水洗資料 約150kgの堆積物サンプルを1mmメッシュまで用いて水洗したにもかかわらず、検出されたのは微量の魚骨・獣骨の小破片にとどまった（表2）。種類を特定できた資料はハタ科？2点とアオブダイ属1点のみで、ほかに未同定の真骨類椎骨が2点ある。

現地採集資料 魚類32点、ウミガメ類2点、哺乳類18点が採集されている（表3）。魚類ではブダイ科が9点と最も多く（前上顎骨・歯骨・咽頭骨ではアオブダイ属のみが確認されている）、ペラ

表 1. 用見崎遺跡・ナガラ原東貝塚水洗試料から検出された脊椎動物遺体。値は同定対象部位の標本数（歯・鱗を除く）。

遺跡名	用見崎										ナガラ原東										
	CS-A VIe 2 mm	CS-1 VI 2 mm	CS-2 VIIc 1 mm	9707-1 VIIc 3 mm	9707-1 VIIIc 1 mm	9707-2 VIIIc 1 mm	CS-B XIII 2 mm	TT98-1 III 1 mm	TT98-2 IV 1 mm	TT99A IV 1 mm	TT99B* IV 2 mm	TT99C IV 3 mm	TT99E IV 3 mm	TT00B-1~4 IV上部 1 mm	TT00B-5~6 IV下部 1 mm	TT01A IV 1 mm	TT98-3 V 1 mm	TT98-4 VII 1 mm	TT00A VII 1 mm	TT02B VII 1 mm	
試料体積 (cc)	15625	21875	12500	7500	不明	3375	2500	2500	2500	20800	10500	70000	不明	12500	6250	13200	2500	14000	2500	12800	
骨重量/1000cc	1.3	0.1	4.3	6.8	不明	ごく微量	2.1	0.5	0.3	1.4	未	0.5	不明	0.9	5.8	0.4	0.3	1.5	0.1	0.7	
骨点数/1000cc	18.6	1.1	34.7	2.5	不明	ごく微量	14.8	8.8	4.0	6.2	5.4	1.0	不明	9.0	22.2	2.8	4.0	4.1	0.8	0.1	2.3
ニシン科								3		16				41	17	3	1	7		4	
ダツ目	11			2								1									
ハタ科	13	1	39	2	13	1		1			1	1		2							
ギンガメアジ属				1																	
アジ科																					
フエダイ科?																					
チヨウチヨウウオ科																					
ヨコシマクダイ?																					
フエフキダイ科	1											2			1					1	
クロダイ属?																					
タイ科?																					
ヒメジ科																					
サバ科																					
ペラ科	6	2	8				2			2	1	1		1							
ブダイ科	10		10	3	30		3	4	3	33	8	22	3	18	33	9	3	15		7	
スズメダイ科										1											
アイゴ属	4		1																	1	
ニザダイ科	35	5	65	5	41		6	3		11	7	4		4	3	3	1	6		2	
モンガラカワハギ科	3		6	+	8			2		2	2	3		4	5		1			1	
ハリセンボン科																					
真骨類:未同定・保留*	213	13	266	5	84		22	2	1	37	19	23		18	47	6	11			5	
真骨類:同定不可	3	2	16	1	2	+		4	5	14	4	2		17	15	13	4	5	2	3	
魚類小計	288	23	430	18	197	+	37	19	9	114	42	55	3	104	135	35	10	44	2	24	
カエル類																					
ヘビ類	1								1	2	3	3		1	1		1			2	
ウミガメ類			2																		
リクガメ類								2	9	15	13	2		6	2	2	11			4	
カメ目																					
ネズミ類																					
イノシシ				1	1			1	2	2	1	1		2						1	
ヒト																					
合計	290	23	434	19	201	+	37	22	10	129	57	72	5	112	139	37	10	58	2	30	

* TT99B は分析済みの 2 試料 (TT99B-1, TT99B-4) のみによる値。福泉 (2002a) 表 1 の「ニザダイ型」はニザダイ科にまとめた。「保留」は原報告で「未分析」または「分析未了」としたものの (大半は椎骨)。

表 2. 安良川遺跡水洗資料の脊椎動物遺体

層準		3層							4層	
		No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	ウニ溜		合計	南側砂層中 レンズ
4-8cm ①	8-12cm									
試料体積 (cc)		25,200	25,200	18,900	18,900	不明	不明	不明	不明	不明
試料乾重量 (g)		36,690	35,570	28,330	26,310	7,710	2,030	4,090	140,730	5,590
ハタ科?	主上顎骨	L 1							1	
ハタ科?	尾椎			1					1	
アオブダイ属	上咽頭骨				1				1	
真骨類・未同定	腹椎		2						2	
真骨類・同定不可	椎骨	4	1						5	
真骨類・同定不可	鱗棘	1							1	
真骨類・同定不可	部位不明破片	3	2		3				8	
哺乳類?・同定不可	部位不明破片	1	2		3				6	
破片数合計		10	7	1	7	0	0	0	25	0

科・ハリセンボン科が5点でこれに次ぐ。ベラ科下咽頭骨は歯の配置などからみて少なくとも2種が含まれるが、種名は特定できていない(詳細は後述)。その他、ハタ科・ギンガメアジ属・フエダイ科・クロダイ属・イシダイ属が各1点確認されている。哺乳類は大半がイノシシ(およびそれと考えられる長骨破片)であり、他にジュゴンの肋骨と思われる小破片がみられた。

(2) マツノト遺跡

安良川遺跡と同じく、笠利町の海岸砂丘上に形成された兼久式期の遺跡である。1991年度に砂取り工事に伴う遺跡の破壊に際して大規模な調査(中山1996)が行われたほか、2004年にも破壊を免れた遺跡北側縁辺部が発掘された。以下では2004年の発掘調査において水洗選別によって採集された骨類の同定結果を報告し、合わせて現在分析中の1991年調査による採集資料についても概要を述べる。

2004年調査資料

資料(表4) 2004年調査区で確認された主要な遺物包含層はI層~II層である。これらは腐食質の暗色砂層

で、貝殻や土器などの遺物をやや密に含む。また、調査区南端崖面においてII層下に厚く堆積する白色砂層中に、わずかに暗色(腐植質?)を呈する遺物包含層(VI層)の局所的な介在が確認された。VI層では貝殻や土器などの分布はごく希薄だが、後述の通り魚骨がややまとまって検出されている。I層・II層からは兼久式、VI層からは弥生時代併行期の土器が出土している。

これらの遺物包含層から、水洗選別用試料として計3ヶ所で堆積物サンプルを採取した(サンプルNo.1~No.3)。サンプルNo.1は調査区南端のI層~II層に設定したコラムサンプルである。30cm×15cm、厚さ約40cmのコラムを厚さ10cm単位で4分割し(No.1-1~1-4)採取した。サンプルNo.

表 3. 安良川遺跡現地採集資料の脊椎動物遺体の組成

分類群	NISP	MNI
ハタ科	1	1
ギンガメアジ属	1	1
フエダイ科?	1	1
クロダイ属	1	1
イシダイ属	1	1
ベラ科B	3	3
ベラ科(その他)	1	1
ベラ科	1	-
アオブダイ属	7	2
ブダイ科	2	-
ハリセンボン科	5	3
真骨類・同定不可	7	-
ウミガメ科	2	1
小型哺乳類/鳥類	1	-
イノシシ	14	1
ジュゴン?	2	1
哺乳類・保留/同定不可	2	-
合計	52	17

表4. マツノト遺跡（2004年調査）で採取した堆積物試料の概要。重量はすべて乾燥重量。+はごく微量

試料番号	層準	体積 (cc)	水洗前総重量 (g)	水洗後の残留物の重量 (g)												流失物 *		
				土器		礫	炭化物	獣骨		魚骨			その他 *			合計	重量 (g)	%
				4mm	4mm	4mm	4mm	2mm	4mm	2mm	1mm	4mm	2mm	1mm				
No.1-1	I層	4500	6620	63.0	61.4	0.25	0.10	0.10	+	-	-	659	85	199	1068	5552	83.9	
No.1-2	I層	4500	6680	6.0	-	0.15	0.10	+	0.05	0.10	-	141	55	235	437	6243	93.5	
No.1-3	I層 / II層	4500	5920	-	30.2	-	-	-	0.50	0.05	-	98	22	191	342	5578	94.2	
No.1-4	II層	5400	7040	-	-	-	+	-	0.30	0.05	0.05	140	12	196	348	6692	95.1	
No.2	I層	7500	8640	-	41.7	0.05	-	-	1.00	0.50	0.05	191	36	242	512	8128	94.1	
No.3	VI層	7200	9770	-	-	-	-	-	2.90	0.30	-	19	20	845	887	8883	90.9	
合計		33600	44670	69.0	133.3	0.45	0.2	0.1	4.75	1.00	0.10	1248	230	1908	3595	41075	92.0	

* 水洗後残留物の「その他」は主に貝やウニなどの殻だが、1mmメッシュでは砂粒も大量に含まれる（とくにNo.3では大部分を占める）。

* 「流失物」は主に砂泥。重量は水洗前の総重量と水洗後残留物重量の差

2は調査区北側のヤコウガイ散布範囲においてI層から採取したブロックサンプルである。サンプルNo.3はVI層から採取したブロックサンプルである。これらのサンプルは自然乾燥・計量の後4mm・2mm・1mm目の試験フルイを用いて水洗し、残留物の中から骨類を抽出・同定した。

他に現地採集資料も若干得られているようだが、これらについては未分析である。

分析結果（表5） 骨の検出量は少なく、45kgの堆積物試料から110点の骨が得られたにとどまっ

表5. マツノト遺跡（2004年調査）水洗資料の脊椎動物遺体同定結果

試料番号	層準	メッシュ	No.1-1		No.1-2		No.1-3		No.1-4			No.2			No.3		合計
			4mm	2mm	4mm	2mm	4mm	2mm	4mm	2mm	1mm	4mm	2mm	1mm	4mm	2mm	
			4500		4500		4500		5400		7500		7200		33,600		
			6620		6680		5920		7040		8640		9770		44,670		
ハタ科	歯骨								L1						1		
タイ型	歯				1								2		3		
アオブダイ属	上咽頭骨					L1									1		
アオブダイ属	下咽頭骨												1		1		
ニザダイ科	尾椎										1			1	2		
ニザダイ科?	尾椎												1		1		
モンガラカワハギ科	背鰭棘												1		1		
真骨類・未同定	尾椎										1				1		
真骨類・保留	耳石												1		1		
真骨類・同定不可	歯										1				1		
真骨類・同定不可	擬鎖骨										L1				1		
真骨類・同定不可	椎骨				1		1					3			5		
真骨類・同定不可	鰭棘			1		1					2				4		
真骨類・同定不可	鱗								1						1		
真骨類(?)・同定不可	歯									1					1		
真骨類(?)・同定不可	不明	1			2	1	1	2	4		9	25		12	19	76	
哺乳類?・保留	歯?	1														1	
哺乳類?・同定不可	不明	1	2	2	2			1								8	
合計		3	2	3	6	3	2	4	5	1	12	31	2	16	20	110	

た。ただし安良川遺跡（堆積物試料150kgから25点）よりは多い。なお、後述の通り1991年調査区では多数の骨が出土しており、2004年調査区とは骨類の出土状況が異なる。これは、2004年調査区が遺跡の縁辺に位置するため、骨の分布が希薄だったためではないかと考えられる。

出土骨の大半は魚骨である。Ⅰ～Ⅱ層（サンプル No. 1・No. 2）ではアオブダイ属・ニザダイ科・ハタ科が各1点得られたのみである。Ⅵ層は貝・土器などは少ないが、サンプル No. 3からは大型のアオブダイ属・ニザダイ科・モンガラカワハギ科がまとまって検出された。魚骨以外では、サンプル No. 1から哺乳類かと思われる骨片がわずかに得られたのみであった。

1991年調査資料

資料 1991年の調査区は2004年調査区の南側に位置し、本遺跡の中心部に相当すると考えられる。この調査ではヤコウガイをはじめとする膨大な量の貝殻のほか、かなりの量の土器（兼久式主体）や骨類などが出土している。骨類の採集方法は基本的に現地採集（ピックアップ）と推定されるが、一部ではフルイも併用されたらしく、資料によっては小型（2 mm程度以上）の骨も多数混じる。現在同定作業を継続中だが、以下ではこれまでに確認された内容について概要を述べる。なお遺物包含層は上下2層に分かれるとされているが（中山1996）、ここでは暫定的に一括して扱った。

骨類の概要 貝殻の出土量には遠く及ばないものの、骨類も比較的多く、とくに一部の地区ではかなり集中的な出土がみられた。内容は魚骨が圧倒的多数を占めており、次いでイノシシ・ウミガメ類がやや多く、イルカ・クジラ類の破片も普通にみられる。

魚類では、ブダイ科、ベラ科、フエフキダイ科（メイチダイ属・フエフキダイ属）、クロダイ属、ハタ科が多く、コショウダイ類、イトウダイ科、フエダイ科、ニザダイ科、モンガラカワハギ科、ハリセンボン科も普通である。組成が多様で圧倒的な優占種がない点、ハタ科・ニザダイ科に幼魚が多くみられる点、フエフキダイ科・ベラ科の内容が沖縄と異なる点（詳細は後述）、イトウダイ科・コショウダイ類が普通にみられる点などが特徴である。

ウミガメ類は、種が判明したものはすべてアオウミガメであり、若い個体から比較的大型の個体までが混在している。鳥類は同定不可の破片がわずかに得られたのみである。陸獣ではイノシシが大半で、他にネズミ類がわずかにみられた。海獣類はイルカまたは小型クジラ類と思われる小破片が普通であり、他に少数ながらジュゴンがみられるのが特徴である。

2. 奄美・沖縄の貝塚時代遺跡から出土した脊椎動物遺体群の比較

ここでは、これまで調査してきた奄美大島用見崎・安良川・マツノト、沖縄伊江島ナガラ原東の各遺跡の分析結果に他遺跡のデータを加えて、奄美大島と沖縄の貝塚時代後期における魚骨・獣骨などの様相を比較し、両者の共通性とそれぞれの地域性を明らかにするとともに、その環境的・文化的背景について考察する。なお、図2～図4は前報の図1・図3・図4にいくつかの遺跡のデータを追加し再構成したものである。集計の方法は前報（樋泉2002a：52-54）と同様である。

(1) 遺跡産魚類遺体群にみられる奄美大島と沖縄の地域性

奄美大島の用見崎・安良川・マツノトの各遺跡と沖縄のナガラ原東貝塚を比較したとき、明確な相違点として真っ先に気づくのは、魚類組成が奄美大島の諸遺跡とナガラ原東とで明確に異なる点である（図1）。どの遺跡もサンゴ礁または岩礁性魚類が大半を占め、内湾性種や外洋性種などがまれな点では共通するが、奄美大島の諸遺跡ではブダイ科が少なく様々なサンゴ礁・岩礁性魚類が混在しており、特定の種類に偏らない多様性の高い組成が認められるのに対し、ナガラ原東貝塚ではブダイ科が圧倒的多数を占める点で対照的である。この傾向は現地採集資料でも水洗資料でも、基本的には同

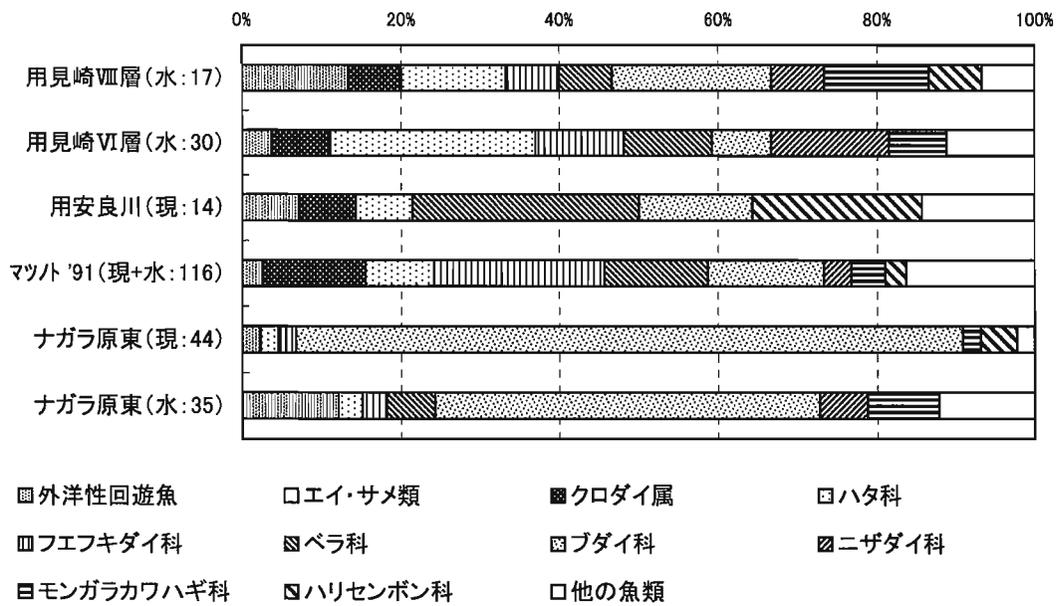


図1. 用見崎遺跡・安良川遺跡・マツノト遺跡・ナガラ原東貝塚の魚類遺体組成(最小個体数比)
 ()内は資料採集方法とMNI総数。現:現地採集(ピック・アップ)資料,水:水洗資料。マツノト'91は暫定結果

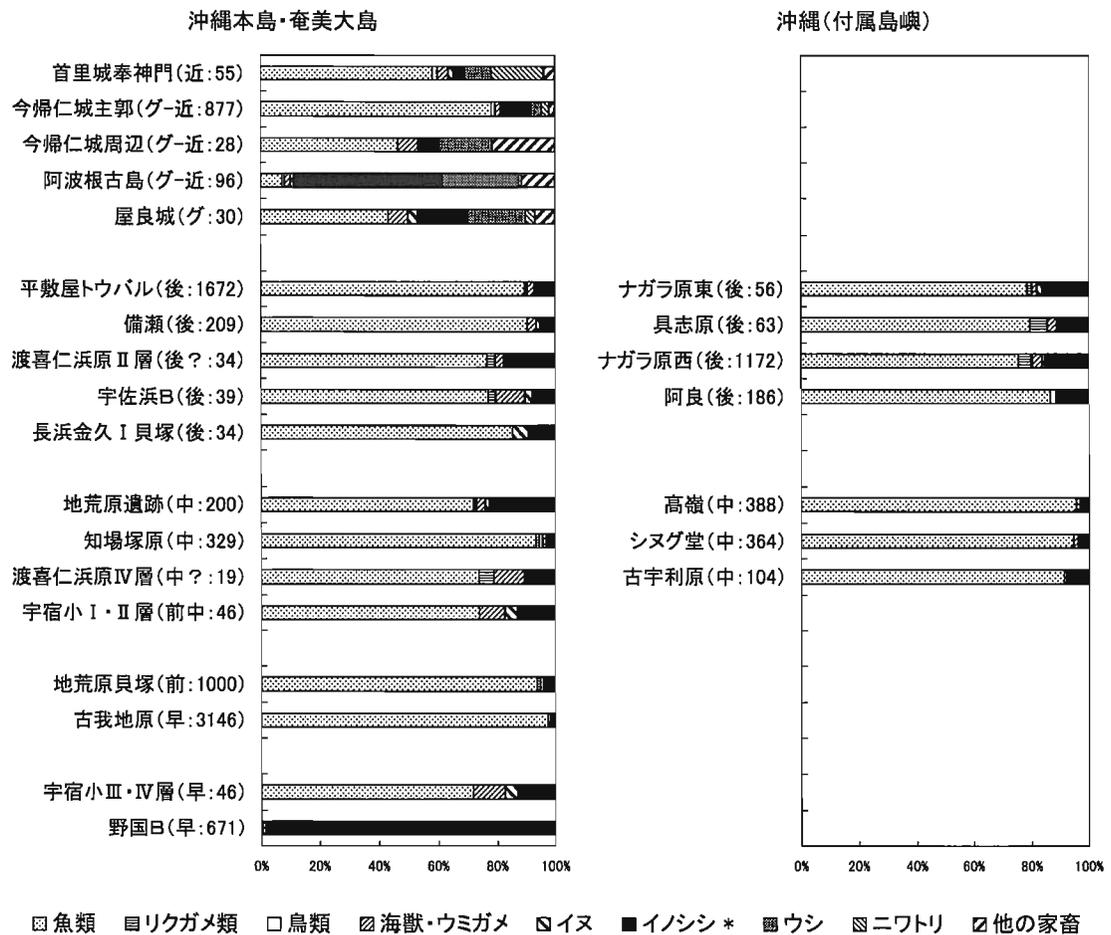
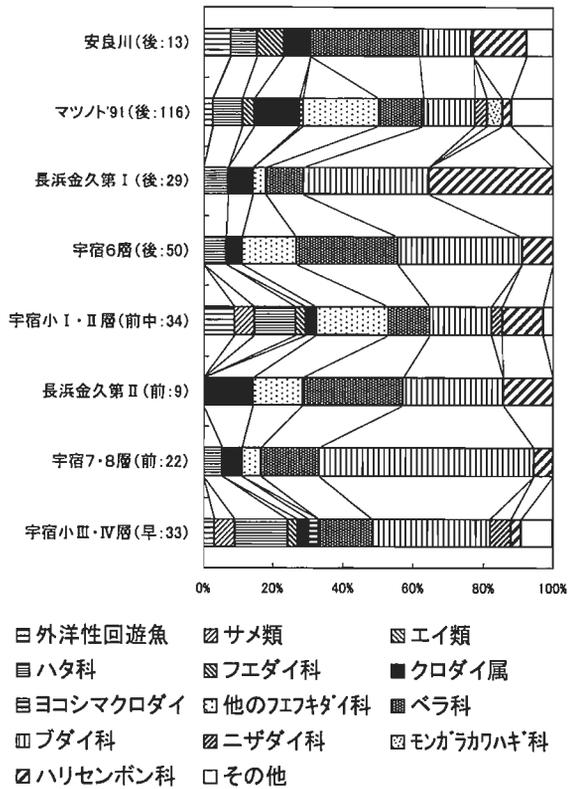


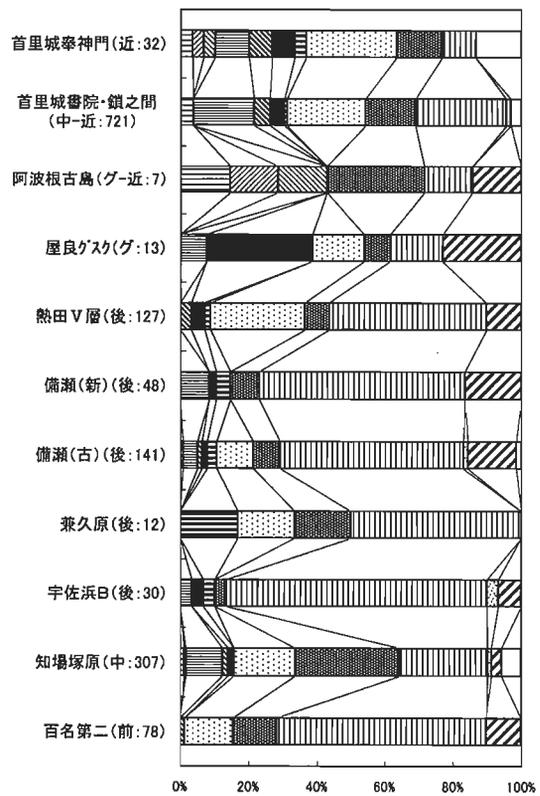
図2. 最小個体数(MNI)による脊椎動物遺体群の組成(現地採集資料)

()内は年代とMNI総数。早・前・中・後:それぞれ貝塚時代早期・前期・中期・後期,グ:グスク時代,近:近世
 *イノシシは報告で「ブタ」と記載されているものを含む。

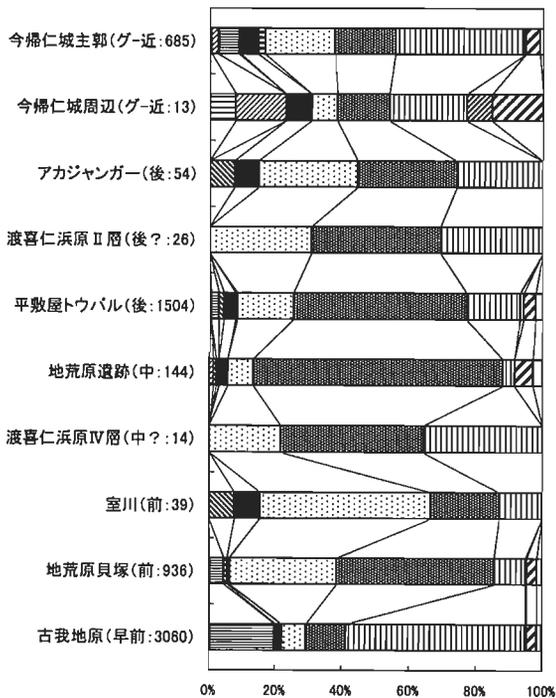
奄美大島



沖縄本島ーサンゴ礁海岸(本部半島北部を除く)



沖縄本島ー金武湾・中城湾沿岸, 本部半島北部



沖縄 付属島嶼ーサンゴ礁海岸

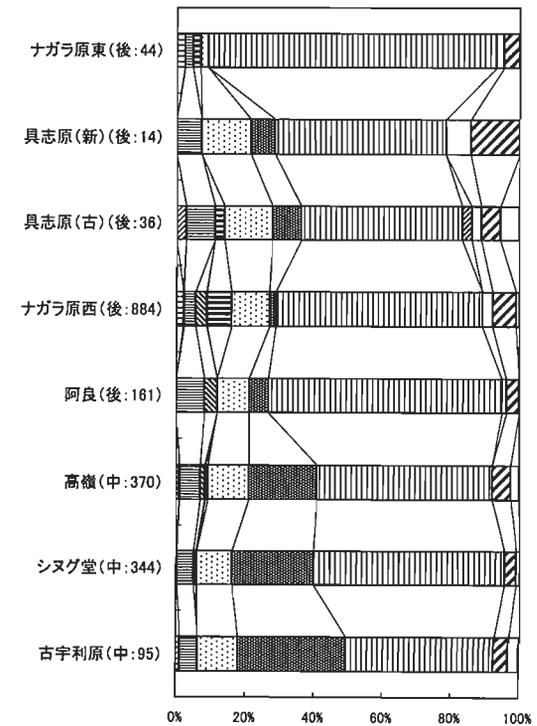


図3. 最小個体数(MNI)による魚類遺体群の組成(現地採集資料)

*外洋性回遊魚:カマス・ダツ科・アジ科・サバ科・サワラなど、マツノト遺跡は現在分析中のため暫定値。

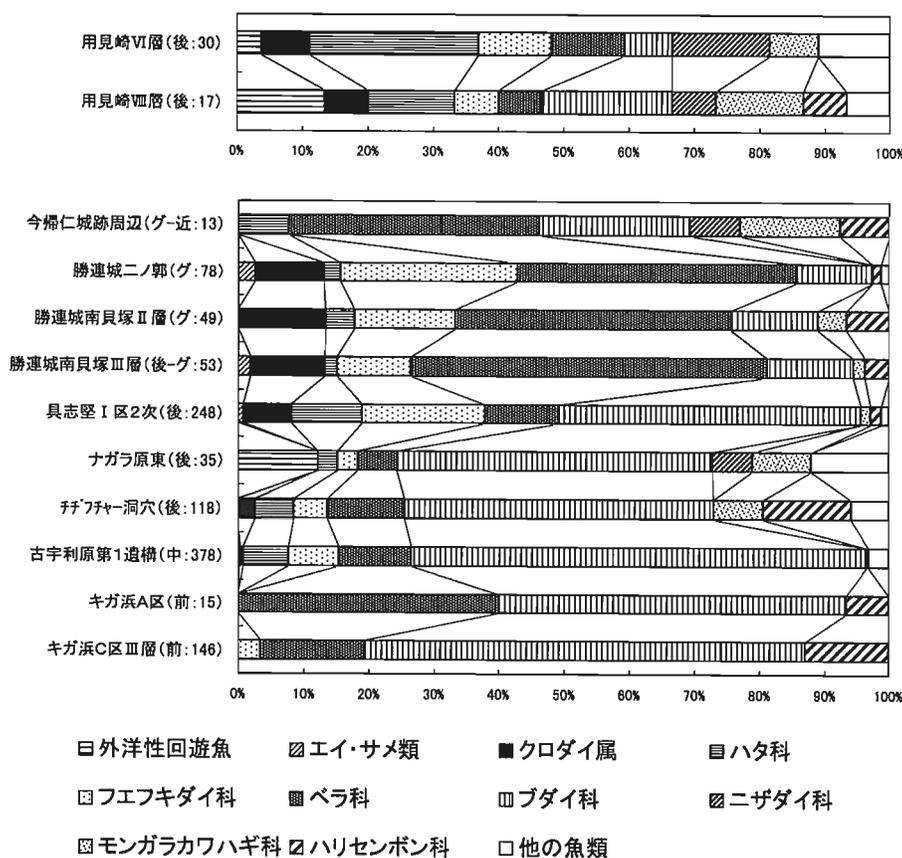


図4. 最小個体数 (MNI) による魚類遺体群の組成 (水洗資料). 上段: 奄美大島, 下段: 沖縄.

* 外洋性回遊魚: ニシン科・ダツ目・アジ科・サバ科

様である。

奄美大島の遺跡産魚類相の多様性については用見崎遺跡の報告ですでに指摘したが (樋泉1997、2002a)、同様の結果が安良川遺跡・マツノト遺跡でも得られたこと、さらに貝塚時代前期～中期の宇宿小学校構内遺跡I・II層でも確認されたこと (名島2003a・2003b) から、この特徴がこの地域の貝塚時代前期以降に一般的なものであることが明確となってきた (図3)。また汽水域を好むクロダイ属がやや目立つ点もこの地域の特徴といえそうである。

これに対し沖縄では、ナガラ原東貝塚の所在する伊江島南岸をはじめ沖縄本島や周辺島嶼のサンゴ礁の発達する海岸の貝塚時代遺跡では、ナガラ原東貝塚と同様にブダイ科の卓越が広く認められる。いっぽう、中城湾・金武湾など砂底質の卓越する内湾の沿岸地域ではフェフキダイ科・ベラ科などが卓越する点で対照的である (図3・図4)。

以上から、奄美大島および沖縄島周辺の貝塚時代遺跡の魚類相を類型化すると、奄美大島にみられる多様なサンゴ礁・岩礁性魚類の混在を特徴とするタイプ、沖縄島および周辺島嶼のサンゴ礁沿岸域にみられるブダイ科の卓越を特徴とするタイプ、沖縄島の内湾沿岸域にみられるフェフキダイ科・ベラ科の卓越を特徴とするタイプに分類できる。以下では記述の便宜上、これらをそれぞれ「サンゴ礁魚類混合型」、「ブダイ科卓越型」、「フェフキダイ科・ベラ科卓越型」と仮称する。同様の結果は名島によるクラスター分析 (名島2003a) の結果でも確認されており、上記の3類型はそれぞれ名島のC群、A群、B群に相当する。この地域性は、貝塚時代前期以降においては基本的に時期を問わず一貫して認められる。

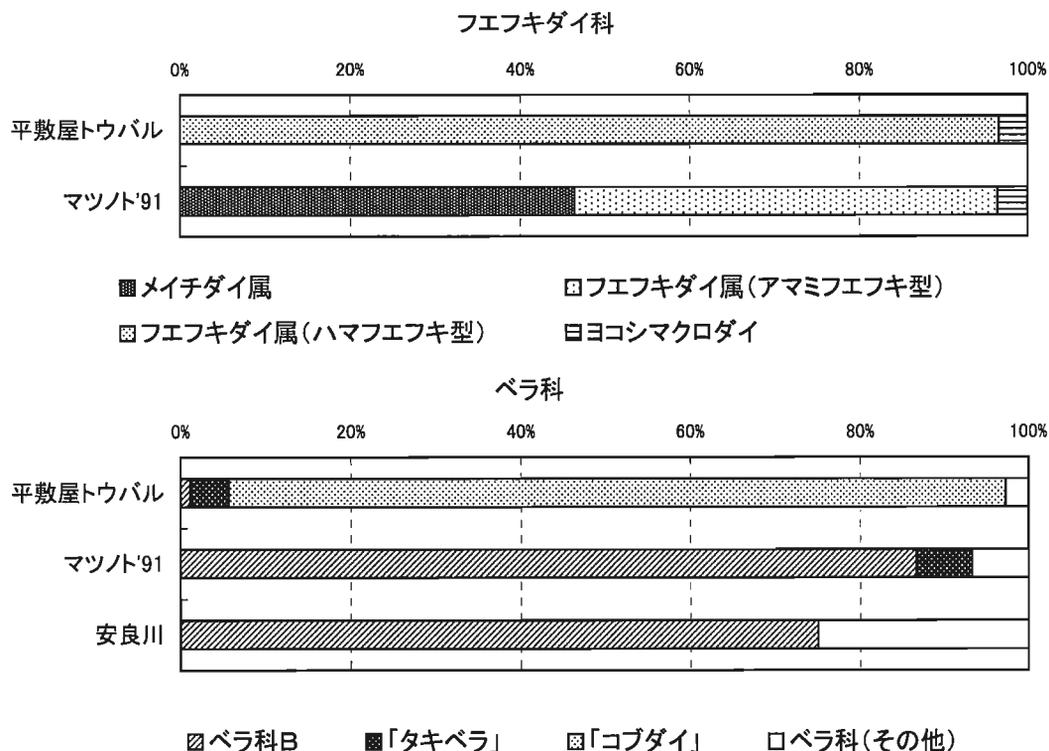


図5. 平敷屋トウバル遺跡(うるま市)・マツノト遺跡・安良川遺跡のフェフキダイ科・ペラ科組成の比較

フェフキダイ科は前上顎骨, ペラ科は下咽頭骨によるタイプ分類. マツノトは分析中のため暫定値.

また、今回マツノト遺跡(1991年資料)と安良川遺跡のフェフキダイ科・ペラ科遺体について詳細に観察を行った結果、いずれも種構成が沖縄と奄美大島とで異なる可能性が明らかとなった(図5)。

フェフキダイ科の同定については、これまでヨコシマクロダイが種レベルで同定可能なことが確認されているが(上野1979)、その他の種類については基礎研究が十分でない(金子はハマフェフキ・イソフェフキ・キツネフェフキを記載しているが(金子2005など)、同定の根拠は明示されていない)。今回、マツノト遺跡の分析に際して筆者と名島弥生氏が共同で現生標本の比較検討を行った結果(樋泉・名島、未発表)、暫定的な所見ではあるが、(1)前上顎骨によって属レベルの同定(フェフキダイ属、メイチダイ属、ヨコシマクロダイ、ノコギリダイの判別)ができる可能性が高いこと、また他のいくつかの部位でも属レベルで判別できる可能性があること、(2)フェフキダイ属については、ハマフェフキなどとアマミフェフキなどの間でかなり明確な形態差がみられるが、種レベルでの同定を行うにはさらに多数の現生標本の収集と比較骨学的検討を要すること、などの見通しが得られた(詳細な記載は稿を改めて行う予定である)。

以上の所見に基づいてマツノト遺跡のフェフキダイ科前上顎骨を検討した結果、メイチダイ属とフェフキダイ属と考えられる資料が大半を占めており、フェフキダイ属の大半はアマミフェフキなどに類するタイプ(以下「アマミフェフキ型」とする)であることが確認された(安良川遺跡ではフェフキダイ科標本が得られなかったため検討できなかった)。いっぽう沖縄については、ナガラ原東貝塚はフェフキダイ科前上顎骨がごく少ないため様相不明であるが、貝塚時代後期の比較資料として多数の魚骨が出土し詳細な同定が行われているうるま市(旧勝連町)平敷屋トウバル遺跡(金子1996)をみると、「ハマフェフキ」と同定されたものが圧倒的多数である。上記の通り、前上顎骨によってハ

マフエフキと他の類似種を確実に判別できるかは明らかでないが、報告書の掲載写真をみる限り、これらがフエフキダイ属であることは確実であり、おそらくハマフエフキまたはその類似種（以下「ハマフエフキ型」とする）が主体と推測される。このように、平敷屋トウバル遺跡のフエフキダイ科遺体はフエフキダイ属、とくにハマフエフキ型が多数を占める点で、マツノト遺跡とは明確に異なる。

ベラ科についても、詳細な同定のための基礎研究はきわめて不十分だが、金子は咽頭骨を「コブダイ」、「タキベラ」、「ベラ科A」、「同B」、「同C」の5タイプに区分している（金子1996、2005など）。なお、筆者の所蔵現生標本の観察ではコブダイとシロクラベラ・イラなどのイラ属の咽頭骨は類似性が高いこと（精査すればある程度の判別は可能と予測される）、平敷屋トウバル遺跡の面する中城湾などの内湾ではシロクラベラなどが多くみられることから、少なくとも「コブダイ」とされる資料については他の類似種が含まれている可能性が高いが、ここでは暫定的に金子のタイプ分けに従って、マツノト遺跡・安良川遺跡と平敷屋トウバル遺跡の比較を試みた。その結果、平敷屋トウバルでは「コブダイ」が圧倒的多数であるのに対し、マツノトではベラ科Bが大半で「コブダイ」がみられず、安良川でも4点のみの資料であるが、ベラ科Bが多い点はマツノトと同様であった⁽¹⁾。

以上のようなフエフキダイ科・ベラ科の内容の違いが奄美大島と沖縄の地域性といえるかどうかについては、さらに現生標本・遺跡出土標本の両面で資料の蓄積と比較を進めてから判断する必要があるが、今後奄美・沖縄の遺跡産魚類遺体群の地域性を解明していく上で、少なくともこれらの分類群については、科レベルでの比較では不十分であることは指摘できよう。

なお、ナガラ原東貝塚で検出されたニシン科（ミズン類）や、用見崎・マツノト遺跡（1991年資料）で多く見られたハタ科の幼魚（伊是名貝塚でも類例が報告されている。金子2001）なども、多数検出される遺跡と、そうでない遺跡に分かれるようであり、地域性を示す可能性がある。今後のデータの蓄積を期待したい。

(2) 魚類遺体群からみた奄美大島と沖縄の海環境と漁撈様式

ここでは上記の分析で明らかとなったサンゴ礁魚類混合型、ブダイ科卓越型、フエフキダイ科・ベラ科卓越型の形成要因について、環境要因（沿岸環境・魚類相）と文化要因（魚類の利用様式）の両面から考察する。

まず、沖縄におけるブダイ科卓越型とフエフキダイ科・ベラ科卓越型の遺跡に関しては、すでに指摘されているように（伊波1982、樋泉2002a、名島2003a）、少なくともブダイ科とフエフキダイ科の多寡についてはサンゴ礁域と内湾域における魚類相の違いを反映したものと解釈してよいだろう。前報で課題としたベラ科の問題について追記すると、先に触れた平敷屋トウバル遺跡は典型的なフエフキダイ科・ベラ科卓越型の遺跡だが（図3）、ベラ科遺体の大半は「コブダイ」と同定されている。コブダイは基本的には岩礁性種であり内湾砂底環境とは調和しないが、先述の通り実際には「コブダイ」とされた資料に類似種で内湾砂底域を好むシロクラベラなどが多数含まれている可能性があり、再検討を要する。また、本部半島北岸においてサンゴ礁海岸に面する地域にフエフキダイ科・ベラ科卓越型の遺跡（今帰仁村渡喜仁浜原遺跡など。図3）が存在する問題（名島2003a）についても、より詳細な同定を踏まえて議論する必要があるだろう。

次に、奄美大島のサンゴ礁魚類混合型の遺跡と沖縄のブダイ科卓越型の遺跡について検討する。いずれもサンゴ礁海岸に面して分布おり、魚類相もサンゴ礁・岩礁性種を主体としているにも拘わらず、沖縄ではブダイ科への著しい偏りがみられるのに対し、奄美大島では多様な魚種が捕獲されている。その原因について名島（2003a）は、(1) 奄美大島北東海岸のサンゴ礁は幅が狭く礁池の発達が悪いこと、(2) 現代のブダイ科を主対象とする追い込み網漁は潮汐にあわせて礁池を出入りする魚群を狙

うため、礁池の存在が漁場の条件となること、(3) このため礁池の乏しい奄美大島北部は大量のブダイを捕獲するには適さない反面、多様な魚種を対象とする釣漁、突き漁、魚毒漁に適した漁場が多いこと、を指摘している。奄美大島北部において、こうした海岸地形の特徴とそれに応じた漁法の発達が漁獲物の多様性の一因となっていた可能性は高い（ただし、用見崎遺跡では多様な小型魚類が主体であること、また貝錘が普通であることから、網漁が主要な漁法のひとつであった可能性は否定できない）。

いっぽう沖縄におけるブダイ科の卓越についても、名島の解釈をさらに延長すれば、礁池を利用した追い込み網漁の発達がその一因であった可能性がある。しかしながら、沖縄の様相にはそうした要因のみでは説明できない問題がある。具体的には次の通りである：(1) サンゴ礁の魚類相はきわめて多様である。ブダイ科は主要素のひとつではあるが、ベラ科・ニザダイ科・モンガラカワハギ科などに比べれば少数派であり（たとえば花崎1994を参照）、ブダイ科のみが突出して優占することは考えにくい。サンゴ礁に実際にみられる魚類群集と遺跡産魚類を比較した場合、奄美大島の遺跡は比較的自然に近いあり方といえるが、沖縄の遺跡の様相は著しく奇異である。(2) 貝塚時代後期における貝錘の普遍性やナガラ原東貝塚における小型魚骨の多産から沖縄における網漁の発達は明らかである。追い込み網などの網漁ではブダイ科以外にも、ニザダイ・カワハギ類・ベラ・アイゴ・ヒメジなど多くの魚種が捕獲されるのが普通だが（名島2001など）、沖縄ではこれらの魚の出土は少ない。とくにナガラ原東貝塚では、1 mm メッシュによる詳細なサンプリングと椎骨も含めた徹底的な同定を行ったにも拘わらず、ブダイ科が最小個体数比で約半数を占めた。このことはブダイ科への偏りがサンプリングや同定方法の欠陥（樋泉2002a：47）によるものではなく、漁獲物の実態であることを示す。(3) 沖縄島北部の宇佐浜B遺跡（弥生時代併行期）では、沿岸のサンゴ礁は奄美大島北部と同様に貧弱であるにも拘わらず、魚類組成はブダイ科に集中しており（図3、金子1989）、サンゴ礁地形やそれに関連する漁法の違いとは別の要因の関与を示唆する。

以上から、貝塚時代の沖縄においてはブダイ科魚類に対する人間の強い嗜好と意図的選択（ないしは他の魚に対する忌避意識）が存在した可能性を指摘したい。ブダイ科の卓越は、貝塚時代には一貫してみられるのに対して、グスク時代以降は中南部の遺跡を中心に魚骨が減少し（図2）、サンゴ礁海岸域においてもブダイ科の減少と組成の多様化が生じている（図3）。これは、上記のようなブダイ漁に象徴される貝塚時代文化の精神性がグスク時代には急速に失われたためと解釈することもできる。

(3) 「イノー型」と「ヒシ型」の用語について

伊波（1982）は沿岸環境の観点から、ブダイ科の卓越する遺跡を「ヒシ型」、フエフキダイ科の卓越する遺跡を「イノー型」として類型化した。しかしながら、この用語については再考を要するようと思われる。伊波のいう「イノー型」の典型的な遺跡が多く分布するのは金武湾・中城湾沿岸域だが、金武湾・中城湾は砂底質の卓越する内湾であり、湾内沿岸にイノー（礁池）～ヒシの带状構造を特徴とするサンゴ礁地形は発達していない。つまり「イノー」が礁池とおおむね同義であるならば、中城湾や金武湾はイノーではない。したがって、これらの沿岸域の遺跡を「イノー型」と呼ぶのは適切とはいえない。沖縄諸島に限って言えば、ブダイ科卓越型は「サンゴ礁型」、フエフキダイ科・ベラ科卓越型は「内湾型」と呼ぶほうが妥当かと思われる。

ただしこれに奄美大島を加えると、類型名称の設定は少々複雑となる。というのは、用見崎・安良川・マツノトなどの諸遺跡が分布する奄美大島北部東岸も、上記の通り発達程度は低いものの明らかなサンゴ礁海岸であり、出土魚類もサンゴ礁・岩礁性種が卓越しているので、「サンゴ礁型」の範疇

表6. 用見崎遺跡・安良川遺跡・マツノト遺跡・ナガラ原東貝塚の脊椎動物遺体の比較

地域		奄美大島北部				沖縄伊江島
遺跡名	用見崎 (Ⅷ層)	用見崎 (Ⅵ層)	安良川	マツノト (1991年調査)	ナガラ原東	
年代	5～6世紀?	兼久式期 (7世紀前後)	兼久式期	兼久式期	6世紀前後	
魚類	量	比較的多い	比較的多い	少ない	多い	比較的多い
	組成	多様:ハタ・ベラ・ブダイ・ニザダイ・カワハギ類など	多様:ハタ・ベラ・ブダイ・ニザダイ・カワハギ類など	多様:ベラ・ブダイ・ハリセンボンなど	多様:フエフキダイ・ベラ・ブダイ・クロダイ・ハタなど	ブダイが圧倒的多数
	サイズ	大型魚が主体	小型魚が主体	不明 (大型魚主体?)	大小混在	大小混在 (小型魚が多い)
ウミガメ類	なし	ごく少ない	ごく少ない	やや多い	ごく少ない	
海獣類	なし	なし	ごく少ない:ジュゴンあり	イルカ/クジラ類普通 ジュゴンあり	なし	
イノシシ	少ない	少ない	少ない	やや多い	やや多い	

に入るからである。ここでは暫定的に、奄美大島にみられる多種混在型を「奄美サンゴ礁型」、沖縄にみられるブダイ科卓越型を「沖縄サンゴ礁型」、沖縄のフエフキダイ科・ベラ科卓越型を「沖縄内湾型」と仮称しておくが、類型名称についてはさらに検討が必要である。

(4) 奄美大島北部の諸遺跡にみられる遺跡間差

用見崎・安良川・マツノト・ナガラ原東の各遺跡における骨の出土量・内容を表6に整理した。これをみると、奄美大島の各遺跡は比較的近接した位置にあるにもかかわらず、遺跡ごとに脊椎動物遺体群のパターンが大きく異なっていることがわかる。

まず骨類全体の出土量をみると、安良川遺跡では他の遺跡に比べ骨類が極端に少ない(図6)。すなわち、150kg近い堆積物サンプルを詳細に水洗したにもかかわらず骨類はほとんど検出されず、現地採集資料についても約280m²の発掘面積からすれば出土量はごくわずかなものであった。これに対し、マツノト遺跡(1991年調査区。現地採集資料のため図6には示していない)では大量の魚骨・獣骨類が採集されており、用見崎遺跡でも水洗選別によって多数の魚骨が検出されている。

魚類は用見崎遺跡とマツノト遺跡で多い。また、用見崎Ⅵ層とマツノトはハタ科・ニザダイ科に小型魚が多くみられる点で類似している。いっぽう、用見崎Ⅷ層では白砂層中に大型魚骨を含む小規模な包含層の介在が認められたが、土器・貝などは検出されなかった。データ不足のため表6には示していないが、マツノト遺跡の2004年調査区Ⅵ層においても類似の様相が確認されている。

ウミガメ、イルカ・クジラ類、イノシシはマツノト遺跡のみで多く、他では少ない。用見崎遺跡では現地採集資料が未分析のため様相が不明確だが、マツノトより少ないことは確実である。なおジュ

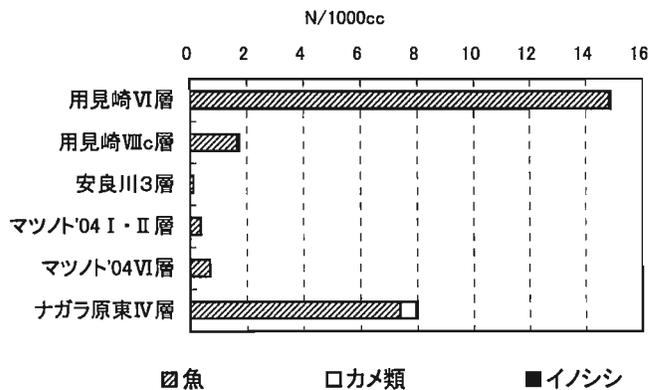


図6. 各遺跡における骨類の包含密度(堆積物1000ccあたりの出土数)

*体積が判明している堆積物サンプルのデータに基づいて作成
*魚骨の数は同定対象部位のみ。未同定・保留・同定不可の資料も含む。ただし歯・鱗は含まない。

ゴンはマツノト遺跡と安良川遺跡で確認されている。

全体として、マツノト遺跡では漁労・狩猟の各種要素が揃っている。これに対し、用見崎遺跡では漁労のみが活発であり、その内容もⅥ層では小魚漁、Ⅷ層では大型魚の漁に偏っている。安良川遺跡では、骨類からみる限り漁労・狩猟活動の痕跡がきわめて希薄であるが、鉄製釣針や貝錘が出土していることから、漁獲物を他所に搬出している可能性が考えられる。

以上のように、本地域では狩猟・漁労の様相に遺跡間で著しい違いがあり、マツノト遺跡では狩猟・漁労がフルセットで行われているのに対し、他の遺跡での活動は部分的である。このことから推測すると、マツノト遺跡は各種活動が行われる拠点的な集落であり、用見崎遺跡Ⅵ層と安良川遺跡は限られた活動の場として形成されたものである可能性が指摘できる。なお、用見崎遺跡Ⅷ層・マツノト遺跡2004年Ⅵ層（年代は兼久式より古い）は形成中の砂丘上に形成された大型魚漁の短期的なキャンプの痕跡と推定される。

これらの遺跡の周辺地形をみると、用見崎遺跡と安良川遺跡は笠利半島の先端近くに位置し、背後に丘陵が迫っているのに対し、マツノト遺跡の周辺には平坦な段丘面が広がっている。また周辺の海岸は、いずれも遺跡前面にサンゴ礁の裂け目（溝状地形）が入り込んでいる点では類似するが、マツノト遺跡ではその規模が特に大きい。マツノト遺跡と他の遺跡の性格の違いは、こうした周辺の地形条件の違いとも対応しているように見える。今後、各種人工遺物や貝類も含め、個々の遺跡の性格を総合的に評価することにより、本地域の兼久式期の社会と生業の実態解明がさらに進展することが期待される。

謝辞：熊本大学木下尚子・甲元眞之・杉井健・小畑弘己の各先生および笠利町教育委員会中山清美氏には安良川遺跡・マツノト遺跡の調査に参加する機会を与えていただき、また多くのご援助・ご教示を賜った。沖縄県立埋蔵文化財センター岸本義彦氏、北谷町教育委員会中村愿氏、千葉県立中央博物館黒住耐二氏、札幌大学高宮広土氏、東大阪市文化財協会松田順一郎氏、伊仙町教育委員会新里亮人氏には、調査や研究会での議論を通じて数々のご教示を賜った。琉球大学河名俊男先生にはサンゴ礁地形について多くのご教示を賜った。国立歴史民俗博物館西本豊弘先生・小林園子氏、慶應義塾大学名島弥生氏には所蔵の現生標本を閲覧させていただいたほか、西本先生には資料分析の便宜を図っていただき、名島氏にはマツノト遺跡の同定・分析作業に際して多くのご教示・ご協力を賜った。沖縄国際大学江上幹幸氏には文献資料の収集にご協力いただいた。熊本大学文学部考古学研究室の学生の方々には発掘現場での試料採取作業などにご協力いただいた。末筆ながら、以上の方々に厚く御礼申し上げる。

(注)

(1) 安良川遺跡報告書におけるベラ科咽頭骨のタイプ名（樋泉2005）は、本報と異なるので注意されたい。安良川遺跡報告書の「ベラ科A」、「ベラ科B」は、それぞれ本報での「ベラ科B」、「ベラ科（その他）」に対応する。

(文献)

伊波寿賀子 1982「沖縄本島先史時代から見た漁撈活動について—出土魚骨の同定をもとに—」物質文化38

上野輝弥 1979「沖縄県伊江島ナガラ原西貝塚産魚類遺骸」伊江島ナガラ原西貝塚緊急発掘調査報告書自然遺物篇伊江村教育委員会

笠利町教育委員会編 2005「安良川遺跡」笠利町教育委員会

金子浩昌 1989「宇佐浜B貝塚出土の脊椎動物遺存体」宇佐浜遺跡発掘調査報告 沖縄県教育委員会

金子浩昌 1996「動物遺体（軟体動物を除く）」平敷屋トウバル遺跡 沖縄県教育委員会

- 金子浩昌 2001 「伊是名貝塚の動物遺体」伊是名貝塚—沖縄県伊是名貝塚の調査と研究— 勉誠出版
- 金子浩昌 2005 「脊椎動物遺体」, 首里城—書院・鎖之間地区発掘調査報告書, 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 金武正紀ほか編 1991 「今帰仁城発掘調査報告Ⅱ」今帰仁村教育委員会
- 樋泉岳二 1997 「用見崎出土の脊椎動物遺体 (予報)」研究室活動報告32 熊本大学文学部考古学研究室
- 樋泉岳二 2002a 「脊椎動物遺体からみた奄美・沖縄の環境と生業」先史琉球の生業と交易 —奄美・沖縄の発掘調査から— 熊本大学文学部
- 樋泉岳二 2002b 「ナガラ原東貝塚の水洗選別試料より検出された脊椎動物遺体 (第4報)」考古学研究室報告第37集 熊本大学文学部考古学研究室
- 樋泉岳二 2003 「ナガラ原東貝塚の水洗選別試料より検出された脊椎動物遺体 (第5報)」考古学研究室報告第38集 熊本大学文学部考古学研究室
- 樋泉岳二 2005 「安良川遺跡から出土した脊椎動物遺体群の概要」安良川遺跡 笠利町教育委員会
- 中山清美 1996 「マツノト遺跡の発掘調査」奄美考古4
- 名島弥生 2001 「サンゴ礁の漁場の利用—奄美大島小湊湾南側の事例から—」民族考古5
- 名島弥生 2003a 「琉球列島における遺跡出土魚種組成の比較」東海史学38
- 名島弥生 2003b 「宇宿小学校構内遺跡出土の動物遺存体について」奄美考古5
- 花崎勝司 1994 「沖縄島崎本部沿岸における魚類相」沖縄生物学会誌32
- 宮城弘樹編 2005 「今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ」今帰仁村教育委員会
- 本部町教育委員会編 1986a 「備瀬貝塚—下水道工事に伴う緊急発掘調査報告—」本部町教育委員会
- 本部町教育委員会編 1986b 「具志堅貝塚発掘調査報告」本部町教育委員会
- 本部町教育委員会編 1988 「知場塚原遺跡発掘調査報告」本部町教育委員会